

藤吉修忠さんよりお便りが届きました。

《第26回土門拳文化賞公募展「奨励賞」受賞！》

第26回土門拳文化賞公募展に初応募した拙作「沈黙の声」(カラー30枚組写真)が奨励賞に選ばれました。それを受けて先日朝日新聞和歌山総局から取材を申し込まれ、お受けした結果1月15日朝刊(和歌山版)に掲載されて居りました。

和歌山 13版 2021年(令和3年)1月15日(金) 享月 日 業斤

写真家土門拳(1909〜90)の出身地の山形県酒田市が主催する写真コンテスト「土門拳文化賞」の奨励賞に、和歌山市の写真愛好家藤吉修忠さん(81)が選ばれた。沖縄戦の傷痕から漂う「鬼哭」に耳を傾けた作品が評価された。

26回目の文化賞には全国から138人(3861枚)の応募があった。藤吉さんの「沈黙の声」は、住民が強制集団死(集団自決)に追いこまれたチビチリガマ(沖縄県読谷村)など沖縄の戦跡をめぐった軌跡を30枚組みでまとめた。

沖縄との出会いは1993年、2泊

沖繩戦 犠牲者の「声」追う



藤吉修忠さんの「沈黙の声」

土門拳文化賞奨励賞に藤吉さん

3日の観光旅行だった。最初に訪ねた「ひめゆりの塔」(沖縄県糸満市)で、戦場に動員された女子学生の歴史を初めて知った。同行した妻(69)は泣き、「彼女たちは本当に死ななければならなかった」と言った。

写真を始めたのは会社勤めを終えて61歳から。妻の言葉にずっと引っかかっているという藤吉さんは、証言録を読んで沖縄戦を学びつつ、2014年からは年に2回、ガマ(洞窟)や摩文仁の丘といった戦跡をまわって撮影を重ねてきた。

そうして心に湧きあがってきたのは「憤」という。ある人は言う。「彼女たちは無駄死にはなかった。お国のために一生懸命に戦ったのだから」。藤吉さんは「そうだろうか」と考える。生きて恋をして仕事をして……という生の無限の可能性を奪ったのは誰か。死を強いた側の責任はどうなっているのか。もはや反論できない犠牲者の無念を作品のタイトルに込めた。

(下地毅)



藤吉修忠さん

システムキッチン・システムバス 14丁目32番地

なお、審査員の大西みつぐ先生の選評は、僕の意を読み取って下さっていて感動しました。

◎大西みつぐ先生の選評

「沈黙の声」藤吉修忠氏作品

沈黙の声とは、戦後75年を過ぎた今でも沖縄の「ガマ」の中から私たちに「鬼哭」として発し続けられるものだ。7年にも及ぶ作者の取材は、93年に観光で訪れた「ひめゆりの塔」での痛切な記憶に始まる。戦跡は人間の生きた痕跡として現在も克明に立ち上がっていく。時として花鳥風月ばかりが「風景」として持て囃されていく昨

今、光と影は写真の表層の描写からさらに深いところに届いていくひとつの「いのち」であることがこれらの写真群からよくわかる。

《自肅生活中のお楽しみ》

コロナ禍の中、撮影地へ行くにも制限が有り上手く行きません。自肅在宅も増えましたがストレスは有りません。自宅でワイフの指導で料理や菓子作りを楽しんでいます。昔拙宅で会社の仲間をお招きして庭のバーベキューピットで BBQ パーティーを何度かしました。

その時にお遊びで詠えたシェフ服を引っ張り出して気分を出して様々な菓子を焼いて楽しみました。

その雄姿の姿も写真も添付しました(笑)。

